

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語 授業で使用する教授法・学習方法の現状

土井ギーゼラ

私はこの度、国際学生成績評価のプログラムに加盟している学校を参観したが、その中の学校の生徒たちには抜群の成果が証明された。それはこれらの学校が運動をとり入れた授業を展開していることに起因すると考えられる。エンヤ・リーゲル氏は、ドイツの青少年の全人的な自己形成を内容とする学校教育の展開と構想にかかわる指導的な教育研究者である。

スイスのゾーロトゥルンでは小学校教師、エドゥアルト・ブーザー＝バツリ氏が「体を動かしながら学習する」という全く独自のメソッドを展開させていた。

両国でのこうした構想の展開をこの報告書で述べたい。

報告書はこのテーマのための研究資料と、あるドイツ人学校創業者との対談を視野に入れたヘッセン州の学校参観と、スイスにおける二つのプログラムを内容としている。時間的な制約のため、調査と参観はドイツに限られてしまった。それゆえ、はじめに調査結果を掲げ、それから補足的にヘッセン州の三校を紹介する。それに続いて、スイスのプログラムから明らかになったことを紹介することにしよう。それから結論と私の展望を述べることにする。

ドイツの状況

本来の学習や健康を改善する目的で、体を動かすことが毎日の学校生活に組み込まれている授業プログラムは、ドイツでは“Bewegte Schule” ベウエグテ・シューレ（意味：活性化を取り入れた学校）、スイスでは“Schule bewegt” シューレ・ベウエグト（意味：学校が活力をうむ、そして学校は動

かされている）と呼ばれている。

1990年の半ば以来、このペウエグテ・シューレのプログラムはライプツィヒ大学のスポーツ科学部の学校体育教授法と運動教育法の教授だったクリスティーナ・ミュラー氏によって開発され、推し進められてきた。授業中と休憩時間、つまり学校生活の中での運動を一体化するというプログラムで、特に基礎学校が活性化されなければならないという考え方である。

この考え方がさらに目指しているのは、単に子どもたちの身体能力を鍛えるだけでなく、運動を介して種々の認識と多様な経験を可能にし、認識に関する学習を容易にし、社会的な学習を助成し、情緒的経験を呼び起こし、自分自身についての考えを子どもたちが積極的に作り上げるようにサポートすることである¹⁾。

クリスティーナ・ミュラー氏の活性化する（基礎）学校²⁾

ドイツ語圏における多くのスポーツ科学研究機関、例えばビーレフェルト大学、ライプツィヒ大学、ヴェルツブルク大学あるいはスイスにおいて、この分野の研究がなされ、その研究成果は教育学部の学生たちに、補足的なゼミの形でさらに伝達されている。

ペウエグテ・シューレ・プログラムの考え方はもともとスイスのスポーツ教育学者ウルス・イリィにまでさかのぼる。イリィは1980年代のはじめに伝統的な“Sitzschule”（意味：座りっぱなしの学校）の中に、もっと運動を取り入れるという考えを支持した。彼の論拠はとりわけ補償思考に結びついていた。そうこうするうちにスポーツ科学や教育学の文献の中で、とくに基礎学校における学習の改善に関して、ペウエグテ・シューレについての広範囲に及ぶ議論がおこなわれるようになった。

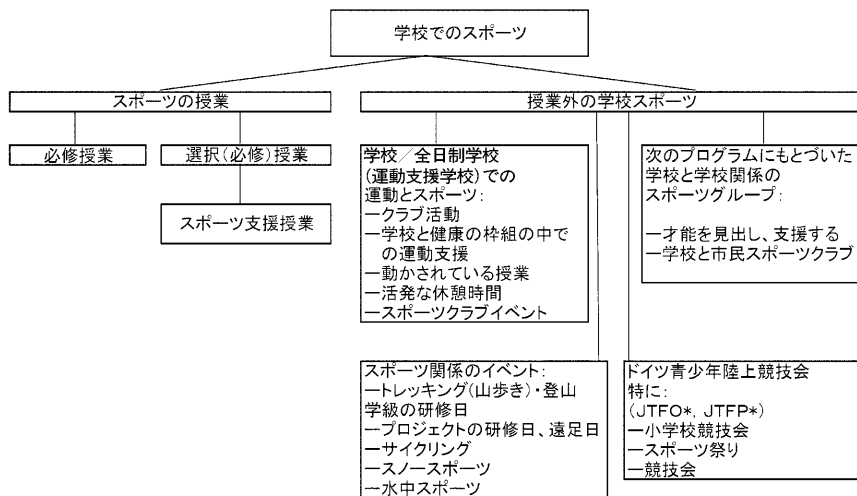
ヘッセン州文科省の政令（2014年8月1日公布）によると、学校スポーツは“スポーツのための教育とスポーツによる教育”という二重の課題を考慮して、

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用される教授法・学習方法の現状

2つのグループに分けられる。1つは通例、週2時間おこなわれる本来の体育授業であり、もう1つは、普通の授業の中で体を動かすこと、アクティブな休憩時間、スポーツクラブの行事、さらに例えば山歩き、登山、学級の研修日、サイクリング、スノースポーツ、ウォータースポーツといったスポーツ行事、さらにプログラムに基づいたスポーツグループ、才能を見出だし支援すること、学校と市民スポーツクラブなど、そしてなんといってもドイツ青少年陸上競技会あるいは運動会、そして学校外でのスポーツである³⁾。

表1 ヘッセン州の学校スポーツの編成

2014年4月30日公布 ヘッセン州の学校スポーツはその二重の課題(スポーツのための教育とスポーツを通じての教育)を考慮してつぎのように構成されている。



スポーツの授業及び授業外の学校スポーツは「学校と健康」の重要な構成要素であり、したがって健康支援学校(振興)学校の展開に非常に寄与

* JTFQ: オリンピックのための青少年競技会、JTFP: パラリンピックのための青少年競技会

ベウエグテ・シュレーの立証パターンは基本的には三つの異なったタイプに分けることができる。

1. 発達一および学習理論的立証パターン

人間の基本的な欲求である運動は探索する機能を果たしている。子どもたちは学習課程が総合的に計画され、単なる視覚的アナライザーや聴覚的アナライザーを超えるものが取りこまれている方が、よりよく学習する。筋肉、靱帯、腱や関節にその受容体がある運動知覚器官が学習を改善する。例えば算数や外国語などの科目の学習において、からだを動かすことによって、授業内容をより多く、そしてより長く頭の中に定着させることができる。

2. 医学的・健康科学的立証パターン

これらはすでに1980年代にイリィによって重点的にとり扱われていた。

これに関して緊急につけ加えなくてはならないのは、ドイツのある学年の児童の約50%が太りすぎで、それに伴って身体能力が平均的に落ちてきているということである。

3. 学校プログラム上の立証パターン

学校教育学者ハルトムート・フォン・ヘンティヒ⁴⁾の、学校は教えるだけではなく、生活をして、経験する空間であるべきだという主張から出発すると、その中で生徒たちが元気よく過ごし、経験の可能性が総体的なレベルで提供されるような形をとらねばならない。まさにベウエグテ・シューレの考え方は、個々の教育的慣例行事が独自性を発揮して認められるチャンスを提供することになり、学校のプログラムの構成要素として確立され、学校生活のすべての領域に関連する教育的背景を生み出すことになる。その目的は動きに満ちた学校文化を構築することである。

ドイツの教育制度は州政府の管轄下にある。各州の文科省はカリキュラム作成に権限をもち、基本方針を出す⁵⁾。個々の学校、学校教師あるいは特別なクラスはそれを比較的自由にコーディネートすることができる。ベウエグテ・シューレという文科省が推奨するプログラムは、すべての学校に義務づけられた

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用される教授法・学習方法の現状
ものではない。日々の学校生活にそれらが多少とも集中してとり入れられるように、学校のプログラムや個々の教師の工夫がある。しかし21世紀のはじめから、運動をとり入れ健康を志向する学校が増えてきたと言っていいだろう。ドイツ国内で州ごとのコンクールが催される。それぞれの生徒は自分の学校の授業で、短い休憩時間や長い休憩時間などにベウエグテ・シュレーのプログラムがどのように実現されているかについて、委員会の詳しいアンケートに応えることでコンクールに参加できる。もっとも優れた学校は、実地審査のあとで、“その年の最優秀校” に選ばれる。とりわけ基礎学校がこのプログラムに関心を持っているが、本当の意味でのコンクールに参加するのはその中の一部だけである。ヘッセン州のこの考え方は、科目を結び、科目を越えて構想されており、特に体を動かすことを方針にして授業内容を伝える（全ての感覚を使って学ぶ）ことを、授業中に体を動かす中休み（例えば疲れをとる遊戯、緊張をほぐすトレーニング）、休憩時間の運動（例えば学校内外に運動を促すようなものや、駆けまわられる部屋やサイレントルームなどの設置）、それから動的に振舞うための人間工学的な学校調度品を調えることを内容としている。

ここでヘッセン州ランゲンゼルボルト市の4年制基礎学校のシュレー・アム・ヴァインベルク⁶⁾を例にして、運動を指向する学校の一つのちがった形を紹介しよう。2011年に教育庁から“運動と知覚の部門に対する認定証明書”が、2013年には“食育と消費者教育の部門に対する認定証明書”がこの学校に与えられた。そこに至るまでの道を辿ってみよう。2004年以来、運動と知覚はこの学校のプログラムの主な思想の中で重要な地位を占めてきた。校庭の遊び場をどのような形にするかを学校は両親と子どもたちと一緒に考えてきた。ジャングルジムが組み立てられ、“緑の教室”や茂みのある遊び場が作られ、中庭にはケンケン遊びのためのしるし^{いち}がつけられた。そのための資金は、例えばスポンサーから、学校バザーやクリスマス市やその他の活動の収益からまかなわれた。つぎに200名すべての生徒たちのために、人間工学にかかった椅

子、高さを調節できる机、若干の立ったまま使用する書見台が教室に買いそろえられた。

活性化する授業の始まり。集中力を向上させるために、授業開始ごとに、すべての生徒はバランスと調整のちょっとしたトレーニングをさらにおこなう。さらにこのテーマのために、教師陣との研修の措置が、活動の日や両親との夕方の集まりがアレンジされた。伝統的な体育の授業、スポーツ研究チーム、さらに運動会や青少年陸上競技会への参加も同じようにカリキュラムに載っている。

私が参観したヴィースバーデンの、教育改革的特色を持った公立総合学校であるヘレーネ・ランゲ学校（HLS）と、学童保育から高校卒業試験までの生徒のための私立学校であるクラレントール学園の二校の教育方針と授業法を次に紹介したい。両校は要するに、まだベウエグテ・シュレーのコンテストに参加していない学校である。

研修旅行は2015年11月9日から18日までおこなわれた。

- a) 教育改革的特色を持った総合学校、ヘレーネ・ランゲ学校（HLS）、ヴィースバーデン市⁷⁾

学校訪問は2015年11月10日だった。1847年に公立の⁸⁾女子高等中学校として設立され、1971年から男女共学になった。1986年、エンヤ・リーゲルの指導のもとに教育改革的特色を持った総合学校に変えられた。この学校は、ヘッセン州の特色ある教育をする学校として支援されている。すなわちこの学校が開発した学校制度をさらに発展させ、学校内で価値を評価し、また外部からそれを検討してもらうために、教育界の専門家の訪問を受け入れ、理念、資料やコンセプトに関して基礎になるものを参観者自身の状況に移し替える可能性を与えなければならない。専門的にも支持されているこの学校は、一方ではモデル

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用される教授法・学習方法の現状
 の、他方ではこの“ノウハウ”を伝達する役割をはたしている⁹⁾。
 例のために5年生の年間学習計画表をいれる。

表2 ヘレーネ・ランゲ学校、5年生の年間学習計画表 2012・2013年

月	8月・9月・10月	11月・12月	1月・2月・3月	4月・5月・6月
国語 Deutsch	自由なテキスト、学校についての話、自己をそして他の人たちを知ること	詩の魅力、魅力的な詩、図書の紹介、正書法を探る	水の生き物、童話と伝説、寓話、正書法を探る	原始時代に関する青少年向けの図書正書法を探る
社会 Gesell— schaftslehre	私達と私たちの学校を知る	プランニング、市街研修、ドイツプロジェクト	生き物プロジェクト	先史時代、石器時代、初期高度文化
総合学習 Offenes Lernen	私達と私たちの学校を知る	地球上での方位を知る感覚を養う	11・12月と同じ	プロジェクト原始時代
自然科学 Naturwissen— schaft	生き物の特徴	植物栽培と成長の条件	顕微鏡講習、動物プロジェクト	生き物の発達 ヒト科の動物の発達
芸術 Kunst	紹介のポスター、誕生日カレンダー	オブジェ地球、芸術家を知る	芸術プロジェクト “地球”、 空想の動物、ある 芸術家	洞窟絵画、天然の 顔料
音楽 Musik	音楽を使って音楽家を知り合いになる	ヨーゼフ・ハイドン 音符の意味、音楽 の基礎知識	動物たちの謝肉祭	描写的な音楽 歌を作ろう
数学 Mathematik	図表、円、四則計算を繰り返す	基盤目、縮尺、市街地図、 長さの単位、時、	立体、平面図、直 直な平行線、 ベクトルはいくら かるか？	左右対称、 反射
英語 Englisch	単語の勉強 Friends	…、school free time 二語併用：地球上 での方位を知る	日常生活 ペットと動物	私の周りの人々 プロジェクト 例えばドラマ、 ワークショップ
宗教 Religion	受け入れ	聖書 クリスマス、	(宗教上の) 祭日 世界の子ども達、 ネパール	天地創活の物語
スポーツ Sport	陸上競技、器械体操	体験—冒険 器械体操	素手ですとつかみ あいする、 造形具体化する、 踊る、表現する	球技、陸上競技



ヘレーネ・ランゲ学校
(土井ギーゼラ撮影)



廊下での勉強
(土井ギーゼラ撮影)



ネパール・プロジェクト
(土井ギーゼラ撮影)



原始時代のポスター
(土井ギーゼラ撮影)

5年度から10年度の生徒たちがこの学校に通っている。1クラスおよそ26名、1学年4クラスで、それぞれのクラスは理想として、担任教師と副担任教師によって一貫して受け持たれる。HLSにいる間、ずっと同じ教師の受け持ちになるので、生徒と教師の間に大きな信頼関係が生じる。

“ヘレーネ・ランゲ学校—それはお芝居だ¹⁰⁾。”

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用される教授法・学習方法の現状

1994年ごろからヘレーネ・ランゲ学校のプロジェクトで、生徒たちはお芝居を演じてきた。お芝居のプロジェクトの開設は演出家のアブドル・ルンツェにさかのぼる。かつて HLS の生徒であった彼は、あるときお芝居のプロジェクトのために雇われ、教師と学校当局に、芝居を演じることが子どもたちの人格の発達のために大きな意義を持つことを納得させることができた。そうこうするうちに HLS の活発な学校文化の最も重要な軸足のひとつとして、4つの演劇プロジェクトが一般に認められるようになった。

4つの演劇プロジェクトはいろいろの年度の生徒が1学年のうちに実行する。詳しくは¹¹⁾：

- a) 自由参加の午後の催しとしての小さな演劇工房
- b) 英語劇ワークショップ、1週間、8年度生
- c) 演劇プロジェクト、あるいはそれに代わる映画プロジェクト、5週間、9年度生
- d) 大きな演劇工房、通年、9—10年度生

この演劇プロジェクトは助成金¹²⁾や両親からの寄付金¹³⁾、なかんずく生徒たちが拭き掃除をして貯めた金を資金にし、外部の演出家や作家と一緒に実施される。

ドイツの公立の学校では、市から雇われた清掃員が教室、廊下、階段室やトイレを清掃し、賃金をもらう。しかし HLS の生徒はもう何年も前から、自分たちの学校を清潔にすることに責任をもち、定期的に自分たちで清掃している。

市と HLS の当局との協定で、学校は清掃によって毎年27,000ユーロの金額を受けとり、それで外部の演劇人に十分な謝礼を払うことができる¹⁴⁾。

私たち13名の教員からなるグループは、参観の初めに13歳の生徒に学内を案内された。彼は堂々と建物のいろいろの場所、廊下や壁にかかったポスターの説明をしてくれた。演劇はこの学校における総合的な教育に不可欠な構成要素

として重要である。子どもたちも、演劇は非常に重要なことであるので、放課後、清掃を引き受けることを了解している。

前述の“小さな演劇工房”はヴィースバーデン州立劇場の本業の女優に指導を受けている。学校の教師が彼女に説明や助言を与え、これをサポートしている。生徒たちと一緒に作り上げた劇作品は、5年度から7年度の生徒たちに、それからまたいくつかのヴィースバーデンの基礎学校で、あるいは新しくHLSに入学した生徒たちの前で披露される。

英語劇を担当する8年度のクラスは、まる1週間、伝統的な授業がなく、アイルランド人の演出家と英語でドラマを作り上げる。作業の言葉（演出家との意思の疎通）も脚本の言葉も英語である。ここで生徒たちは普通の授業では通常練習できない¹⁵⁾、英語での“本物のコミュニケーション”を体験する。

9年度では、全部で5週間続く演劇プロジェクト（あるいは選択に応じて映画プロジェクト）にクラス全体としてしか応募できない。このプロジェクトに参加を希望する生徒は、まずすべてのクラスメートの同意を得る必要がある。このハードルをクリアすると、4週間で脚本が練り上げられ、リハーサルがなされ、完成となる。この期間中は朝、登校すると、集中的にリハーサルに取り組む。演劇に取り組むことは、非常に多くの力と規律、それに芝居の題材について真面目に議論を交わすコミュニケーションの覚悟が必要である。最後の週に、個々のクラスでこの劇が上演され、そのあとディスカッションがなされる。必ず受けないといけないテストのための問題はもちろん遅れを取り戻す。ここでも外部から演出家、作家や大学の人が謝礼を受けて学校に来る。教師は助言者であり、学校と彼らを繋ぐ働きをする。

大きな演劇工房は結局、9—10年度の選択必須の科目に属していて、一年を通じて外部の演出家がともに作業する。春の集中的な期間には（初演とそれに続くすべての公演が開催される五月の初め）この科目の生徒たちは授業から免除される。

通常の授業科目に、それとも創造的な演劇の作業にもっと時間をさくべきな



ヘレーネ・ランゲ学校 劇のリハーサル
(土井ギーゼラ撮影)

のだろうか？これは部外者から繰り返してなされる質問である。しかしマインツ大学の評価が示しているように、芸術的・創造的活動に従事することは、生徒たちが専門知識を取得するために本質的に役立つので、この質問を両親や学校はこれ以上、討論する必要がない。

専門知識は通常の科目の授業へも波及する、例えばドイツ語の授業で演劇の準備とおさらい、英語の授業で英語のドラマ・ワークショップのことを後々まで話題にすること、HLSの生徒たちの前で劇を上演すること、クラスで劇のテーマを議論し、説明し、質問に答える、等々。

劇の内容は社会的、倫理・宗教的、文学的あるいは美学的なものである。

もうひとつのプロジェクトのキーワードは“認知症”である。生徒たちはそのためにあらかじめ設定された授業時間中に2、3か月間、町の認知症の老人の世話をする。買い物ですませたり、家事の手伝いをしたり、彼らとおしゃべりをする。どの生徒もひとりの決まった人に責任を持つ。こうして生徒たちは社会的な世話をし、何人かの人たちと一緒に過ごすうちに昔の暮らしについて、老人の考え方や暮らし方、目下の悩みについて、そして認知症について知ることになる。

さらなるプロジェクトは毎年ネパールバザーを開催するユネスコ研究会、自

転車レースやそのほかのいろいろの活動である。それらは青少年が地球上の遠く離れた地方とその住人を知るために役立つ。彼らは身体を動かした際に、反対に自分が何かを動かしたり変えたりすることができることを経験する。彼らは責任を引き受け、ネットワークで結ばれた考え方ができるようになる。学校は知識を伝える機関としてだけでなく、強く、自信のある人間になるように学び、他人と関わりを持ち、互いに意志の疎通ができる高い能力を生徒たちに伝達する機関であるとも考えられている。アイデンティティーの形成と他人を敬いながら共にいることが、この成長段階にとって中心的なテーマである。運動は言語学習にも組み込まれ、大小の休憩時間に、また個々のプロジェクトのなかでも保証されている。生徒たちは別の部屋で勉強をするか、図書室に行くかなどを自分で決めることができるからである。学校のプログラムにさらに取り上げられたプロジェクトは、より活気ある学校をという主張から、校庭をいろいろの運動を可能にする場所に作りかえることである。



エリック・ボイタラ氏
(Kreidestaubgruppe 氏撮影)



エンヤ・リーゲル氏
(Archiv der Zukunft-Netzwerk 氏撮影)

“Campus Klarenthal” クラーレンタール学園

2007年に開設されたクラーレンタール学園は、プロテスタント宗教法人¹⁶⁾に

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用される教授法・学習方法の現状
より新しい私立学校で、同じように教育的に改革されていて、すでに学童保育
所からアビトゥーア(大学入学資格試験)までの生徒たちを指導している。
HLSの元校長のエンヤ・リーゲルは、これで念願がかない、“理想の学校”を
実現しました、と11月12日の会談の際に私に言った。

5年度から10年度までのクラスがあるこの学校は教育改革的な総合学校とし
て役目を果たしている。2015年11月には、352名の生徒が登録した。60,000m²
の面積がある学校は非常に広々としており、構内は広い緑地と多くの古い木立
にとりまかれている。両親の収入によって、基礎学校の学費は1ヶ月、380か
ら660ユーロになり、およそ100ユーロの昼食費が加算される。全児童が富裕層
の子弟に偏らないように、奨学金も使えるようになっている。生徒たちの10%
弱が身体あるいは知的に特別の支援が必要で、車いすに座っているか、読み書
きが苦手か、あるいは他の障害がある。そのためにこの学校では1番の成績/
点数をとることではなく、学校のプログラムとともに青少年が最善の支援をう
け、必要とされ、生きるための準備をするようになることが重要になる。子ど
もたちがあまりストレスを感じないようにとの配慮から、数字で成績が出され
るのは8年度からである¹⁷⁾。彼らは自分でまとめたポートフォリオ(紙挟み)
を携えて三省会談に出て、評価を受ける。学校はフレックスタイムで始まり、
生徒は7時45分から8時30分の間に登校して、自由に勉強を始めることができ
る。11月16日月曜日、私は基礎学校を訪問した。1週間は月曜日の朝の集い、
モモで始まる。講堂で40分の芸術的、スポーツショー的、音楽的あるいは文学
的な集いをどのような形にするかが各学級に交代で任されている。私が訪問し
た時は11歳から12歳の少年少女たちのクラスが後転跳び演技、歌、踊り、詩を
披露した。生徒たちはそのためにポスターを描いて準備していた。クラス全員
がモモに参加し、教員はそれをそっと見守っていた。彼らは全員集会で盛んな
喝采を浴びた。そのあとでモンテッソリ基礎学校の授業が始まり、私はそれを
参観した。この基礎学校のクラスは6歳から8歳の年齢の子どもたちが混ざっ
ている。その長所は年少の生徒が教師にだけに質問をするのではなく、年上の



Campus Klarenthal での朝ごはんと授業（土井ギーゼラ撮影）



Campus Klarenthal での授業（土井ギーゼラ撮影）

生徒たちにも質問することができることである。私は基礎学校の4つのクラスのひとつ、ヘリアントゥス（ひまわり）という名前のクラスを参観した。授業はたいてい“自由な勉強”からなり、そこで生徒たちが題材を自分で作り上げて、2人の教師は教室を歩きまわり、必要に応じて手を貸すだけである。生徒たちは心を開き、そして自分の力で、まったく独自に課題に取り組む。ドイツ語であれ算数であれ、例えば前日にまだを終えていなかった練習帳を開いて取り組んでいる子もいる。基礎学校に必要な書物と教科書は書棚で探し、必要に応じて机まで持ってくることができる。たいていは2人の生徒が、三角形の机を2つ並べ、向かい合って座って勉強していた。

学校には定期的に参観者がある。ここでも決められた生徒が参観者を案内して回っている。私は9歳の女生徒（P90右上の写真）に教室を案内され、広い構内を見て回った。彼女は自分のクラスや校庭で飼っている鶏やうさぎに責任があることや、例えば、もうすぐ馬に乗る許可が出ることを楽しみにしているなどと自分自身のことも話してくれた。学校には2、3頭の馬がいる牧場があり、乗馬グループが馬の世話をしていて、乗馬ができる。10時に始まる30分の運動休憩に生徒たちは教室を出て、遊んでいます。10時30分にこのグループが新たに分けられる。いく人かは水泳の授業のために学校のバスでヴィースバーデンの屋内プールへ、また別のグループは学校の運動場でスポーツをする。また別のグループは自由に勉強をしている。およそ8人からなる4つ目のグループは、パビリオンの大きな入り口のあたりで大きな丸い絨毯の上で輪になって横たわり、英語の授業を受けていた。ひとりの若いアメリカ人女性教師と一緒に遊びながら体を動かしてアルファベットの絵文字のカードで英語の言い回しを練習し、何かを繰り返し自分のノートに書き込んでいた。授業の雰囲気は明るく良い気分でおこなわれていた。一度、ある生徒は単語を覚え、そしてもっときちんとノートに書き込むように注意されたが、それはあんまり授業のようには見えなかった。

生徒たちはそれに続く昼休みにパビリオンの中で、近くでとれた新鮮な食材



Campus Klarenthal 英語
(Campus Klarenthal より提供)

を使い、学内で調理された昼食をとった（11月16日はサラダとヨーグルトが添えられた野菜カレーだった）。午前中に空腹だと、生徒たちは朝食のテーブルでパンにバターを塗って、何か飲み物をとってきて、ほかの生徒たちが隣で勉強していても自分の机で食

事を行うことができる。午後にはまた自由な勉強が予定されていて、いつも2人の教師が付き添っている。支援を必要としている生徒がいることで、若い人は自分たちが学ぶテーマだけでなく、同級生を敬い、親しく付き合うことによって社会的なレベルで非常に多くのことを学ぶことができる。水曜日は時間割に“見学”があがっている。昨年は新聞を読むことに取り組み、毎水曜日、自分たちが興味を持った記事を日刊紙で読む。そのあと新聞で報じられていた風車設備を訪ねていく。さらに新聞のために、いくつかの記事も書いた。放課後や休暇中の自由選択の午後の催しと並んで、作家、美術教師や生物学者など共にする金属細工、ダンス、競争、歌、楽器を習うこと、そしてさらに多くの催しがある。この学園もまだはっきりとはベウエグテ・シュレーと認定されていないが、私の考えでは、言わばすべてを包括しているベウエグテ・シュレーの持ち分のみなを備えている。

スイスの状況

シュレー・ベウエグトは2005年国際スポーツとスポーツ教育年にあたって、スイス連邦スポーツ省（BASPO, マグリンゲン市）によって創設された国家的なプログラムであり、以来各州の教育省会議（EKD）に推奨され、学校における運動と日々の活動性を助成してきた。シュレー・ベウエグトという名称は、生徒たちが運動しながら学び、学習を通じて自分自身のために、そして共同社会のために何かを動かし、何かを変えろということの意味している。もっと運動をというスイスの学校での根拠は、ドイツのプログラムのそれに相当する。この脈絡で、私はここでケッケンベルガー¹⁸⁾によって、活発な学習の様々な形を説明したい。ケッケンベルガーはイリィと同じようにこのプログラムの基礎固めに深く関与している。認知的ストレスと感知的ストレスの変化、しばしば繰り返される変化によって、個々の分野で疲労と不注意に対処できる。脳の血行がよくなり、それによって酸素が脳にいきわたるようになる。また、集中力が回復され、体のバランスもよくなる。関連がない刺激を同時に置くこと。

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用される教授法・学習方法の現状
生徒はある種の知的な問題を解いている間に、体を動かしてもかまわない。

運動は場合によってはモチベーションを高める助けでありうるかもしれない。運動によって注意力が高められる可能性がある。それは気分転換と識別を生み出す。知的な課題はしかし運動の課題と直接的な関係、内容上の結びつきはない。子どもは運動の課題における具体的な行動によって、知的な課題の意味と内容を知る。子どもは運動と身体を経験をするうちに内容を理解することを学ぶ。体を動かして学ぶために適しているのは、例えば体育館、医療教育、ジム、人間工学セラピー、さらに精神運動能力から用具、それからもちろん日常的なすべての用具である。具体的には次のような用具、自転車、ローラー、あらゆる種類のボール、鏡、エアマット、ひげそり用の泡、箱、新聞紙、ロープ、トランポリン、トイレットペーパーのロール、自動車のタイヤ、段ボール箱、チョーク、紐、さいころおよびそのほかの多くのもので可能である。シュール・ベウエグトというプログラムに参加するように呼びかけられているのは、幼稚園から上級学年までのすべてのクラスであるが、主として基礎校（プリマールシュール）が参加している。BASPO はスポーツ科学者や教師の協力のもとに、学校や幼稚園において、授業でおこなわれる体育と並んで、計算問題あるいはドイツ語の問題を解く間に、または休憩時間に、屋内であるいは屋外で、実施されるべき運動プログラムを作り上げた。参加したクラスは少なくとも一学年の間、毎日20分あるいはそれより長く、運動を目的としたスポーツをおこなう義務がある。当該の教師はクラスの参加を BASPO に申し込むと、学校生活に組み入れることができる運動トレーニングに関する多岐にわたる用具を受けとる。教師がクラスの年齢によって選ぶことができる18のトレーニングモジュールがある。主題の面で、内容あるいは運動テクニクの、どこで、そしてどの年齢でそれらが実施されうるかという場所の点で、それらは区分される。

例：体を動かす・心を感じ動かす話（幼稚園と下級3学年）、
休憩の時間は体を動かす（下級3学年と中級3学年）、

学習が動かす（下級3学年、しかし中級3学年も）、

皆で体操、音楽が動かす（下級および中級学年が最適であるが、幼稚園でも）等々、そしてモジュール（栄養あるいは牛乳の意味について）を含めて。

補足的な教材・宿題ノート、運動カレンダー、運動サイコロの形をした補足的な教材は申し出るともらえる。

インターネットのBASPOのサイトで補足的なトレーニング課題とアイデアをダウンロードできる。公式にこのプログラムに参加していなくても、体を動かすことに興味があれば、アイデアと示唆を得ることができるというわけである。スイスでは州によっていくつかの公用語があるから、すべての情報資料、トレーニングモジュール、解説などは三か国語で得ることができる。2015—2016年に、リヒテンシュタインを含めて、スイスで参加したのは10,206クラス程度だった、これはすべての学級のおよそ22.8パーセントである。スイスのカリスマ的なスポーツ選手、スポーツ大使たちは乞われてクラスを訪れ、生徒たちをスポーツの理念に夢中にさせることで、このプログラムを後援する。2015年11月13日金曜日、私はゾーロトゥルン市のコメニウス学習スタジオにエードゥアルト・ブーザー＝バツリ氏を訪ねた。小学校教師の彼は2006年ゾーロトゥルン州のビベリストで“体を動かしながら学習する（Lernen in Bewegung / LiB）”という独自のコンセプトを展開させ、実地に移して普及させた。その授業メソッドをさらに広めるため、彼は意見を同じくする教育学者や保護者と協会を設立した。彼は授業中の運動が認識に関する課題と何よりも強く結びついていることに気づいた。なぜこのメソッドですか、という質問に、自身の子どもたちがよく学校で退屈していたからです、と説明してくれた。これが新しい授業の形を模索するきっかけだった。もし学習がじっと座っている間に起こるのではなく、運動中に生じるとすれば、ということから出発して、彼はリズムをつけるトレーニング、音楽と運動を用いた学習にとりかかった。生徒たちがぱっと生気をとりもどし、授業を積極的にとらえた。彼はそのメッ

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用される教授法・学習方法の現状ソドを次のように説明した。新しいクラスの場合には、ゆっくりゆっくり組立てていきます。まず初めには、子どもたちは読んだり暗記したりしながら、テープの上をただ走るだけでしたが、後には、これが準備された角材にかかります。これが平衡感覚のトレーニングに役立つのです。次第にバランス・スティックが付加されます、子どもたちは平衡感覚と手と目の互いの協調性を鍛えるために、手にスティックを持って歩いたりおしゃべりをしたりします。そしてこれもいつものように知的な課題と結びつけられているのです。およそ4か月後、子どもたちは読んだりトレーニングしたり、お互いにおしゃべりをしながら、さまざまな大きさのローラーの上でバランスをとることを覚えました。ローラーの上で立つことは前後のバランスをとることに役立ちます。ローラーの上に板を載せることで、左右のバランスをとる練習になります。そして最後に、知的な課題を解きながらラウンドアバウトの上で360度回ることをこなすようになります。そのあとで、曲芸のボールと布がもちこまれ、そのあとが一輪車です。用具を使った課業は一日、15分から30分続き、そのあとは今までの授業法で練習問題を解くことになります、とブーザー氏は誇らしげに私に話してくれました。今までの授業法だけで教えられている生徒たちより、彼の生徒たちの方が理解も暗記も早いことがわかりました、と近くの教育大学の学生が言ったのです。集中力と記憶はそれゆえに最大限に鍛えられるのでしょうか、と。

授業の中での運動とその具体的なトレーニングのためのお手本は、いくつかの遊び道具・学習シート、あるいは LiB の学習カード36枚学習内容を記憶するテーマンフェッハーに載っている。

扇状に束ねたこのカード集のねらいは、自動化と学習内容と運動を結びつける学習課程を支援し、授業にリズムをつけて意義あるものにすることである。カード集は授業の中でどのように LiB を効果的に組みこむことができるかを示している。アプローチの章“活性化と集中”はくつろぎ小さな運動課題を集中的に実行する提言をしている。それに続く章では運動しながら教材が練習され、自動化される。



ブーザ氏のデモ
(土井ギーゼラ撮影)



ブーザ氏の授業風景
(E. ブーザ氏撮影)



勉強・運動カード L i B
(E. ブーザ氏撮影)

それぞれのカードに描かれた運動と結びつけることができる学習内容が示されている。2009年にブーザーはその教育プロジェクトのために、スイス教育大学のコメニウス賞を与えられた。彼の小学校と教授法は有名になった。例えばオランダなどの外国からも教師のグループが参観に訪れた。ブーザーは生徒たちと授業の様子をしめす DVD を撮影した。授業法をしめすユーチューブも見つけることができる。

私がゾーロトゥルンを訪ねたとき、説明のために彼は角材に乗っていくつかのトレーニングをやってくれた。退職後も、彼は私的な学習スタジオで、その独特のやり方でさらに授業をしている。彼は資料のすべてをシュレー・ペウェグトのプログラムで使ってもらおうと BASPO に委ねた。

私がゾーロトゥルンを訪ねたとき、説明のために彼は角材に乗っていくつかのトレーニングをやってくれた。退職後も、彼は私的な学習スタジオで、その独特のやり方でさらに授業をしている。彼は資料のすべてをシュレー・ペウェグトのプログラムで使ってもらおうと BASPO に委ねた。

レジュメ

学校において運動を組み入れることは、ドイツでもスイスでもますます大き

ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用される教授法・学習方法の現状な意味を持つようになってきた。知的な学習のために意味のある運動は、とくにスポーツ科学やスポーツ心理学出身で、最近の神経教授法の認識をも考慮にしている学者や教師たちによって研究され、紹介された。

とくにドイツの基礎学校と、それに相応するスイスの小学校がこれらのプログラムに関心をいただいている。

ドイツのベウエグテ・シュレー とスイスのシュレー・ベウエグトの出発点は同じようであるが、学校への採り入れ方に少しちがった持ち味がある。ドイツではコンテストと認定証明書である。これに対してスイスでは、無償で支給されるたくさんの教材用具や学校を訪問するスター的なスポーツ選手、スポーツ大使など広範囲の参加プログラムである。

プログラムは両方とも公的に推奨されているが、それに参加するかどうかは任意である。私が紹介したドイツの学校のうち、ランゲンゼルボルト市のシュレー・アム・ヴァインベルクがベウエグテ・シュレーの考え方に一番合っている。しかし私は先に紹介した教育改革的な特色を持った HLS とクラレンタール学園の両校を、活性化して、動いている学校文化の非常に重要な例だとみなしている。生徒たちは、自分で責任を持った作業、演劇、それに社会的な活動によって責任を自覚して自己を知り、社会的な人間に育っているからである。両校は私が考えていたベウエグテ・シュレーの概念をさらに広げ、研修の初めに期待していたものをずっと超えていた。

ブーザーの学習法は、その教授法の基礎になっているケッケンベルクの学説を非常に忠実に実行に移し、そこに含まれた目標をも達成しているので、私には強い説得力があった。

日本において外国語を授業するために、京都女子大学での私の授業のために、私は研修旅行で得た認識から、より良い、積極的な雰囲気とよりスピーディーな知的学習をひきおこすために、さらに生き生きした課題を外国語の授業に取

りこむことが重要だと思う。

註

- 1) “Bewegte Schule”, Leitfaden, Kultusministerium Saarland, 2010
- 2) Chr. Müller, R. Petzold, Bewegte Schule, Aspekte einer Didaktik der Bewegungs-Erziehung in den Klassen
- 3) ドイツヘッセン州の学校を見学したので、ヘッセン州の文科省(教育省)の政令を載せる
- 4) v. Hentig, Hartmut: Was ist eine humane Schule, 1987
- 5) Kultusministerkonferenz のホームページを参照
- 6) www.schule-am-weinberg.de/ を参照
- 7) www.helene-lange-schule.de, (Integrierte Gesamtschule, Schüler der drei Schultypen Haupt-, Real- und Gymnasium werden gemeinsam unterrichtet, s.dazu die Kooperative Gesamtschule, in der Schüler in getrennten Klassen unterrichtet werden
- 8) 学費がない
- 9) Schulprogramm der HLS を参照
- 10) イングリット・アールリング (Ingrid Ahlring) “Ich kann auch anders!” (私は違うようにでもできますよ! in: Lernende Schule (勉強する学校), S. 46, 2009
- 11) 同じ, S. 16
- 12) 年間の寄附, およそ20~30ユーロ
- 13) このための買入れ金は生徒たちが毎月はらう。
- 14) 「Praxis Schule」5-10, Heft 5, 2006, 15頁 (教育専門誌)
- 15) 普段の授業が全くない
- 16) EVIM (Evangelischer Verein für Innere Mission in Nassau, プロテスタント宣教協会)
- 17) Auf Antrag der Eltern können die Noten für Rechtschreibung in den sprachlichen Fächern sogar ausgesetzt werden
- 18) Köckenberger, H. Bewegtes Lernen, Dortmund, 1997

文献

Barth, Katrin und Maak, Angela: Deutsch mit dem ganzen Körper, 60 Bewegungsspiele für alle Bereiche des Deutschunterrichts, Verlag an der Ruhr, 2009, 98 S
Bucher, Walter (Hg.): 741 Spiel- und Übungsformen, Teil 1 KindergartenVorschule

- ドイツ語圏の義務教育の学校における外国語授業で使用する教授法・学習方法の現状
- und 1.-4. Schuljahr, 2. Auflage, Hofmann-Verlag, 2000, 280 S.
- Bucher, Walter (Hg.): 1070 Spiel- und Übungsformen, Teil 3, Ab 7. Schuljahr, 1. Auflage, Hofmann-Verlag, 2000, 260 S.
- Buser, Eduard: Lernen in Bewegung, DVD
- Clancy, Mary Ellen: Besser lernen durch Bewegung, Spiele und Übungen fürs Gehirntaining, Verlag an der Ruhr, 2008, 208 S.
- Krepcik, Barbara: Rhythmus und Körper, Reihe Musik und Bewegung Band 1, Universität für Musik und darstellende Kunst Wien, Re Di Roma-Verlag, 2012, 133 S.
- Minimayr, Nina: Wie Gehirn und Körper lernen Reihe Musik und Bewegung Band 2, Universität für Musik und darstellende Kunst Wien, Re Di Roma-Verlag, 2012, 220 S.
- Schweizerischer Verband für Sport in der Schule (Hg.): Lernen in Bewegung, Themenfächer, Ingold Verlag, 2008.

〈キーワード〉

Bewegtes Lernen 活性化を取り入れた学校
Methoden des Fremdsprachenunterrichts 外国語教授法
Lernen und Bewegung ベウエグテ・シューレ